

ページを繰るにつれ、私の世界で「異様な空自」が存在感を濃くしていく。農場で暮らす牛や豚の姿と、食卓に盛り付けられたお肉。どちらも容易に頭に浮かぶのに、その二つのあいだはぽっかりと空いている。彼らは、どこでいのちを失い、どうやって食卓に並ぶのか――そのいのちの過程を、私は知らなかった。

何度本を閉じようとしたら。牛が捌かれていくあまりにリアルな描写に、思わず目を塞ぎたくなった。突きつけられる残酷な現実には、率直な感想が口をつく。「果たしてこれは知る必要があるのか」――しかし、その感情は思わぬ形で変化していく。そのきっかりは、いのちの過程を知らないことの根底には差別意識が潜んでいる。という筆者の指摘だ。かつて日本では、死んだ動物の肉は「穢れている」とされ忌み嫌われていた。その考えから、牛や豚の解体や処理を任された人々もまた「穢れている」と見

なされ、いわれの無い差別と偏見の目を向けられてきたのだ。そして今もなおその差別は根強く残り、彼らの存在や仕事についてはその多くが意図的に語られずにいるという。それを知ったとき対照的に頭に浮かんだのは、街に立ち並ぶ飲食店の数々と、より美味しいものを求め大量の食品を消費し続ける現代人の日常だ。言うまでもなく、その食生活において肉という食材は重要な役割を担っているくとだろう。そうであるにも関わらず、

人々とは畜労働という職業を蔑視し社会の片隅へ追いやられて、意図的に「見えないもの」にしている。あまりに不自然なこのふたつの乖離に、私は違和感を覚えた。と場で働く彼らは私たちの代わりに動物を屠っているのであり、本質的にそのいのちを奪っているのは自分自身であるはずだ。この不一致はまさしく、生きていくうえで避けられないものに向き合わず、欲を満たそうとする人間の身勝手さの現れではないだろうか。

そんな矛盾した差別の構図に、私は当たり前
 前のように憤りを感じた。しかしそれと同時
 に思い起こされたのは、この本を最初に開い
 たとき自身の姿だった。牛が解体される様
 子に気分を悪くし、思わず本を閉じようとし
 た。あのとき、私の心には確かに人間の身勝
 手さが存在していたのではないか。そして本
 当に私が目を背けたか、たのは、この本では
 なくと畜という行為そのものだ。たのではな
 いだろうか。そんな考えが頭をめぐる。しか

しそう自覚してもなお、ページをめくる手は
 重いままだ。た。
 ーと畜はかわいそう。ー残酷だ。やはり湧
 いてしまふそんな感情が心を翳らす。そんな
 私の心に光を差したのには、一人の工場労働者
 との出会いだった。本の最後に紹介される彼
 は、かって山羊をと畜したとき、何度殴って
 も気を失わせることができず苦しめて殺して
 しまふ。半世紀も前の話であるが、彼はその
 山羊のことを思い返して目に涙を溜めていた。

驚いた。こんなにもいのちと真正面から向
 き合っている人がいるなんて。と畜とは、
 いのちと向き合う仕事なんだ。まるでそう言
 うかのように真剣にひとつの命を想う彼の姿
 は、何よりも美しい存在に映った。
 私が目を背けたその場所に、誇り高く生き
 る人がいた。このことは、私に強い衝撃を与
 えた。表面だけを見て感じ取ったたくさんの
 言葉を言い訳にして、と畜から目を背けよう
 としたあの安逸な忌避感には、その背後にあっ
 た彼の思いも誠実さも、その全てを隠してし
 めていたのだ。隠される側は、どれほど心
 を傷つけられてきたことだろう。その痛みは
 想像するに耐えない。だから私は、かつての
 疑問にこう答えることが出来る。いのちをい
 ただく者として、このいのちの過程は知らな
 くてはいけないうとなんだ。
 知らない。これはなんと便利な言葉かと
 つくづく思う。この一言で、自身とその物事
 の関係を断つことが出来るのだやら。そんな

言葉を操りながら自分に都合のいい情報だけを
 を取り入れて、見たいものだけに目を向ける。
 不思議にもこの時代は、それが簡単にできて
 しまう。そんな現代を生きる私たちだからこ
 そ、迫りくる情報の渦の中で立ち止ま、考
 えなければいけない。見つめなければいけな
 いものに、見て見ぬふりをしてはいいか、
 と。
 と畜ばかりではない。私たちが無意識のうろ
 に目をそらし、知らないふりをしているもの
 が他にもきつとあるはずだ。それに直面した
 とき、知らないと言って目を背けるか、
 それとも真つすぐ向き合うか――この本の
 読書体験は、まさにその葛藤の縮図であつた。
 といえるかもしれない。目を背けることはと
 ても簡単で、向き合うことは時に勇気のいる
 ことだ。しかし、この本を読んだ私だからこ
 そ、常に後者を選ぶ人でありたいと心から思
 う。それこそが、自身の世界を鮮やかにする
 唯一の方法だと思ふから。